

昭和60年度
(1985)
第25回大会

男子優勝 札幌藻岩 女子優勝 札幌清田

【 専門委員長 寸評 】

男子団体戦では、札幌藻岩が順当に9連勝。今年も圧倒的な強さを見せた。女子団体戦も札幌清田のシングルス2人が他を寄せ付けなかった。

個人戦では、藤原（札幌藻岩）が三冠に輝き、安定した力を発揮していたのが特に光っていた。女子個人戦では、阿部も三冠に輝いた。地区大会では、同行の後輩、坂本に負けていたので、先輩の意地を見せて雪辱を果たした。試合も、高校生離れした、内容の濃い展開であった。坂本（札幌清田）長谷川（札幌藻岩）の2年生は今後が大いに期待できる場所である。

【 全国大会 】

団体戦男子の札幌藻岩は、昨年のインターハイでベスト8に入ったメンバー中3人が残っており、今年も活躍が期待されたが、千葉県八千代高校と大接戦の末敗れた。本来持っている力を十分に発揮できなかったのが残念であった。

女子団体戦の札幌清田は、肘の故障を押して出場したダブルスの佐藤が本来の持ち味を出すことができなかったことが響き、ベスト16に留まる結果となった。

男女の両校は、今年どちらもベスト8入りできる力を持ちながら、重要な局面で実力を出し切れなかったことがたいへん残念であり、それが今後の課題とも言えそうだ。

個人戦では、男子シングルスで藤原（札幌藻岩）が大健闘し、ベスト32まで進出。ダブルスでも藤原・長谷川組（札幌藻岩）がベスト16に入って、来年度のボーナスポイント（出場枠増）獲得まであと1勝というところまで迫った。

女子シングルスでは、2回戦以降は組み合わせに恵まれず、3回戦進出はならなかった。ダブルスでは、阿部・坂本組（札幌清田）がベスト8を目前にしなが、兵庫の厚い壁を崩すことはできなかった。

来年度へ向けて、全国大会を経験した2年生には、更に努力を期待したい。

（ 専門委員長 緒方 壽人 ）

優勝のよろこび

男子 札幌藻岩高等学校

「優勝」これはスポーツの世界では誰もが目指すものであり、そこには勝った者しか味わうことのできない嬉しさがあります。そして、それが毎日の厳しい練習によって勝ち取ったものであれば、なおさらのことです。

「Game set and match won by Moiwa！」この瞬間、札幌藻岩高校男子庭球部の優勝が決まりました。

今年の優勝で連勝記録は「9」となり、10連勝まであと一歩というところまでできました。今年は、勝って当たり前というところがありました。なぜなら、今年のレギュラーメンバーのうち3人が、昨年全道大会での優勝経験があるからです。しかし、試合では何が起こるかわかりません。実際に、選手一人一人の心の中には、もし負けたらどうしようという不安があったに違いありません。少なくとも僕にはありました。加えて、「優勝」の2文字を思うだけでのし掛かってくる言い知れぬプレッシャーがありました。しかし僕たちには、日ごろからの厳しい練習によって鍛えた体力と精神力がありました。そして何より、日ごろの練習の成果を出せば勝てるという自信がありました。辛い練習に耐えてきたからこそ、優勝という経験に出会えたのです。

僕たちにとって全道優勝というのは、一つの通過点であり、本当の目標は全国大会での上位進出です。でも、そんな目標も、道予選で負けてしまえば、何の意味もありません。そんな意味で、この1勝のはかり知れない重みを思わずにはいられないのです。そして、この喜びが、後輩にも、そしてそのまた後輩にも、毎年、毎年、受け継がれていくことを願わずにはいられないのです。

最後になりますが、このような素晴らしい経験をさせていただいたことに対し、先生ほか多くの関係者の皆様に心から感謝を申し上げます。ありがとうございました。

(札幌藻岩高校 主将 藤原克記)

優勝のよろこび

女子 札幌清田高等学校

私は高校に入るまで、テニスは、野球やラグビーなどの団体競技とは違い、一人だけでやるスポーツだと思っていました。しかし、高校に入ってテニスにも団体戦というものがあることを知り、実際に経験してみてからは、この考えが少し変わりました。

団体戦とは言っても、コートに入って試合をするのは1人、多くてもダブルスの2人です。でも、団体戦ではコートの中の選手だけが頑張っても勝てないのです。コートの外で応援しているチームの全員が、コートの中の選手と心を一つにして戦うことが何よりも大切なのだということがわかりました。

私が1年生の時、インターハイの道予選の決勝で、清田は負けてしまいました。一人一人の実力だけを見れば、絶対に清田の方がまさっていました。敗因は、相手の学校の方が清田よりもチームワークがとれていたことだと私は思います。あのときの私は試合に出る

こともできませんでしたが、見ているだけで、自分が試合をしているように、心臓がドキドキしていたことを憶えています。試合に出られるようになってからは、まわりで応援してくれている仲間みんなが、あの時の私と同じ気持ちと一緒に戦ってくれていることを感じることができました。そして、そのことにどれほど勇気づけられたかしれません。選手が辛いときは、応援している人たちだってそうなのです。それが団体戦です。また、後輩たちが応援しながら、試合をしている選手以上に緊張して戦う経験は、実際に自分が試合に出たときに力を発揮してくれる大切な経験になると思います。

チームのなかでは選手しか試合に出られないのですから、選手への周囲の期待はとても大きいのです。そして、責任も重いのです。でも、その重さに負けてしまったら、自分だけでなく、先生やチームの仲間が続けてきた苦労や努力までが無駄になってしまいます。そして、その重さに打ち勝ったときに初めて、それまでの苦労や努力は報われるのだと思います。

私たち3年生にとっては最後のインターハイの道予選、団体戦決勝では、再び私たちが1年生の時に負けた学校と対戦しました。結果は3対0のストレート勝ちで雪辱を果たすことができました。本当に良かったと思います。そして、今度は実力でもチームワークでも、私たちは負けていなかったと思います。これもチームの一人一人が努力し、みんなで協力して頑張ってきた成果だと私は思います。

後輩たちには、チームで助け合うことの大切さを絶対に忘れないでほしいと思います。そして、みんなが力を合わせてつかんだ勝利の喜びをたくさん経験してほしいと思います。

(札幌清田高校 主将 阿部有希子)

全国高校総体 (第75回全国高等学校庭球選手権大会) 石川

8月1日～7日 辰口丘陵公園屋外テニスコート